

## 4. 重い病気の子どもたちとその家族を支える社会活動

### D. メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン (本部東京都千代田区)

鈴木 朋子

(一般財団法人 メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン)

#### 設立と目的

「メイク・ア・ウィッシュ (Make-A-Wish)」。英語で「願い事をする」という意味である。一般財団法人メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパンは、難病 (命に関わるような大変な病気) と闘う子どもたち1人ひとりの大切なウィッシュ (夢や希望、願い事) を叶えるお手伝いをしている団体である。

メイク・ア・ウィッシュは1980年にアメリカのアリゾナ州に住むクリス (当時7歳) の「警察官になりたい」という夢を叶えたことから始まった。彼の夢を聞いた地元警察官たちは、クリスのために素晴らしい計画を立てた。その日クリスは、特注の制服に身を包みアリゾナ州警察の正式な名誉警察官としての任命式に出席したのである。ヘリコプターに乗って市内をパトロールし、駐車違反を取り締まるなど警察官としての任務を全うし、残念ながらその5日後、亡くなった。「同僚を失った」と思った警察官たちは、クリスのために殉職した警察官としての葬儀を執り行った。

この出来事は全米に伝えられ、多くの人の心を動かした。世界中には難病のために夢を叶えられないかもしれない子どもたちがいるに違いない、その子どもたちの応援をしたいという願いから、メイク・ア・ウィッシュは生まれた。たった1人のクリスの夢から始まったメイク・ア・ウィッシュは、今ではアメリカ国内に62の拠点を置き、世界40カ国に活動の場を広げ、夢を叶えた子どもの数は350,000人にも及ぶ世界的なボランティア団体となった。日本では1992年から活動を開始し、この24年間で夢を叶えた子どもたちは2,700人を超えた。毎年約200人前後の子どもた

ちの夢が叶っている。

#### 活動対象

メイク・ア・ウィッシュでお手伝いする対象となるのは、当団体の作成した「病名リスト」に該当する病気、もしくは同等の難病にかかっている3歳以上、18歳未満の日本に住む子どもたちである。自分の夢がきちんと伝えられる年齢として、3歳からが対象となる。また、メイク・ア・ウィッシュは「子どもの夢を叶える」ことを目的としているため、夢に対して子ども自身に認知能力があることも必要となる。

誰にでも、夢や希望、願い事がある。そして何かを願う気持ちは、大人も子どもも、健康な人も病気と闘っている人も、みんな一緒のはずである。けれども大変な病気と闘う子どもたちは、何かしたいことがあっても「病気が治ったらね」「よくなったらね」「退院したらね」と、先延ばしにされてしまうことがよくある。毎日こんなに頑張っているのに、お見舞いに来てくれる人はみんな決まってこう言う。「頑張ってるね」「頑張るんだよ」。「頑張れ」という言葉は、時にはとても残酷である。子どもたちは、もうすでに頑張りすぎるほど頑張っている。「頑張っても頑張っても、病気をやっつけることができない」「こんなに頑張っているのに、もっと頑張らなくてはいけないの?」そして、いつしか「願い事」をすることすらあきらめてしまう、そんな子どもたちがたくさんいる。

人は皆、嬉しいことや楽しいことがあると、ワクワクドキドキ、何だか心が弾んで元気になる。私たちは、病気の子どもたちにも、同じようにワ

クワクしたり、ドキドキしたり、もっと心を弾ませてほしいと思う。「今でも、できることがあるんだよ」そう伝えたいと思う。病気だからといって我慢をしないで、今をもっと楽しんでほしい、そして、夢を叶える素晴らしさを知ってほしい。そう願って、活動している。

---

## 子どもへのアプローチ

病院を訪問して、実際にお子さんにお会いして、「どんな願い事があるのかな?」「キミの夢は何?」とお聞きするところから、その子ためだけのオーダーメイドのプロジェクトがスタートする。メイク・ア・ウィッシュの活動は、時として、「命に限りのあるお子さんの最後の願いを叶える」「よい思い出づくり」と捉えられがちである。けれども、決してそうではない。むしろ、1つ夢を叶えることで、子どもたちは必ずと言っていいほど、「次の夢」「次の目標」に向けて歩き出す。病気のために忘れていた「子どもたちが本来もっている力」を取り戻し、子どもたちは次の夢に向かって心を開き始めるのである。夢の実現は、ゴールではなく、新しい夢へのスタートラインなのだ。

また、私たちが病院を訪ねることで、「これまで忘れかけていた日常が戻ってきた」そんな言葉をいただくことがたびたびある。朝起きて、検温をしたり点滴をしたり、注射をしたり、という毎日のなかに、Make-A-Wish（願い事）をするこ

とで、「今、外は寒いのかな?」「出かける時には何を着て行こう」とか、私たちが普段当たり前のよう感じている感覚を取り戻すことができるのである。病気だからダメなんだ、病気だから何にもできない、病気だから…という考え方から解放された時、心がすーっと解放されて、きっと心が元気になるのだと思う。病気でもいいんだ、病気だって、何でもできる、そして応援してくれる人がたくさんいる。今のままの自分、病気のままの自分の存在を認めてもらえたこと、それは、きっと子どもたちの生きる勇気へとつながると私たちは信じている。

---

## 今後の歩み

大変な病気と闘うなかで、子どもたちは将来への不安や家族に心配をかけていることへの切なさが心が縮こまっていることもあるだろう。また、お父様やお母様は、「もっと早くに気づけば…」あるいは「健康な身体に産んでやれなかった」など、自身を攻めることもあったかもしれない。けれども、「キミの夢を応援しているよ、一緒に願い事を叶えよう」と応援してくれる人たちがいることを知る時、きっと子どもたちもご家族も、胸を張って生きていける。「難病と闘う子どもたちの夢のお手伝い」というプロジェクトの意味は、ここにもあると思うのである。メイク・ア・ウィッシュは、これからも1人でも多くの子どもたちの夢を叶えるために、活動を続けていこうと思う。